

## 東日本大震災 | 連続ルポ1 | 動き出す被災地

Great East Japan Earthquake | Serial Report 1 | Devastated Areas Have Just Started to Stir — no.13

## 被災を超えて地域の歴史文化を受け継ぐ試み——気仙沼市の二つの事例から

Attempts to Inherit Local History and Culture over Suffering——From Two Cases of Kesenuma

## 三浦卓也

Takuya Miura

株式会社マヌ都市建築研究所主席研究員／1963年東京生まれ。千葉大学工学部建築学科卒業。同大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。歴史的資源の保全活用、歴史的市街地のまちづくり。共著書に『新・町並み時代——まちづくりへの提案』『歴史的環境の形成と地域づくり』『それでも「木密」に住み続けたい!』ほか

## 田揚裕子

Yuko Taaga

ふるさと建築代表／1985年生まれ。工学院大学工学部建築学科卒業。同大学大学院工学研究科建築学専攻修了。日本建築史、茅葺き建築。震災5日後に宮城県に入り、約10カ月間現地で活動を行った

東日本大震災から一年半近くが経過した。生活再建が最優先される復興において、地域の傷ついた歴史文化資源を受け継ぎ、個性あるふるさと再生に活かしていこうという動きが起きている。動き始めた被災地の取組みとして、気仙沼市における二つの事例を紹介したい。

## 気仙沼市風待ち復興検討会

気仙沼市内湾地区は、気仙沼街道と東浜街道の宿場町および漁港として栄えたまちである。出漁に適した「西釜の風」を港で待つことから「風待ち地区」とも呼称されている。内湾に面した魚町は、漁船相手の問屋が並び、沖から帰港する船に目立つように屋号を掲げ、「屋号通り」と呼ばれる町並みを生み出していた。

被災前、内湾地区には多数の歴史的建造物が存在していた。これらは昭和4年の気仙沼大火後の復興建築であり、当時の水産業の隆盛や気仙大工等の優れた技術集団の存在を背景として、和洋さまざま、百花繚乱のデザインによりつくられていた。地域の建築家らによる「風待ち研究会」が組織され、歴史的建造物の調査が行われ、国登録文化財への登録が進んでいた。しかし、今次震災の津波により、多くの歴史的建造物が破損、流失した。例えば、屋号通りの要所にあった「男山本店(酒店店舗)」は3階建の洋風建築であったが、1、2階が流失し、がれきの中に3階部分が残った。男山本店の映像は被害の象徴として多くの媒体で取り上げられた。

これらの破損した登録文化財は、一時はがれき撤去の申請も出され、跡形もなくなるところであった。まして内湾地区は、かさ上げや防潮堤等の大規模な基盤整備が予想されており、所有者のひとは「保存は物理的に不可能」と考えていた。しかし、被災後に実施された調査(国土交通省「復興における歴史・文化資源の継承等調査」)では、内湾地区にまだ350棟を超える歴史的建造物が存在することがわかり、今後の個性ある景観形成や、復興まちづくりに資する貴重なまちづくり資源であることが徐々に認識されてきた。

2012年5月に、登録文化財をはじめ内湾地区の歴史的建造物の保存活用を考えるべく、風待ち研究会および市民有志、市職員の有志、筆者等の外部専門家により「気仙沼風待ち復興検討会」が立ち上げられた。会は文化庁の「NPO等による文化財建造物の管理活用等事業」の支援を受けて活動が進められている。また、被災した文化資源の復旧に対する国内外の募金を集める「SOC(Save Our Culture 東日本大震災被災文化財復旧支援事業)」により応急修理等に対する支援が受けられることとなった。内湾地区の歴史的建造物を群としてとらえ、まちづくりに向けて活用していこうとする動きが共鳴を得たと聞く。

SOC基金を受けて、傷ついた5棟の応急措置が始められている。上層階のみ流されて残存した男山本店と角星店舗は大切に養生され、元の敷地に曳き家された。今後、大規模な基盤整備が想定されるが、その際にはいったん曳き家を行い移動させ、基盤整備後元の位置に戻



図1 | 東日本大震災被災前の気仙沼市内湾地区魚町の町並み【出典：気仙沼3.11まるごとアーカイブ】



図2 | 被災して下層階が流失した男山本店店舗



図3 | 平成22年9月に応急修理と曳き家を実施している男山本店



図4 | 震災前尾形家(2010年8月)[図4-6 撮影: 田揚裕子]



図5 | 震災後尾形家(2011年4月)



図6 | 部材調査(2012年7月)

し再建することを計画している。こうした歴史的建造物の活用のモデルケースとするべく、復興段階から歴史的建造物を見学し地域住民との交流を図るモニターツアーも企画され、観光の専門家の協力を得ながら実施されている。

今後も、年内に想定される内湾地区の都市計画との調整、応急修理に続く再建費用の調達、観光等への効果的な活用等、課題は多い。これまで得られてきた、市の文化財と都市計画セクションの連携、外部専門家のネットワーク、文化庁やSOC基金による多様な支援と柔軟な運用等を今後も活かして、次のステップを目指したいと考えている。

#### 尾形家住宅の復興支援

一方、工学院大学後藤研究室は、東日本大震災で被災した文化財を救うための活動として、気仙沼市小々汐地区に所在していた尾形家住宅の復興支援に取り組んでいる。

尾形家は、気仙沼湾の東岸の岬に位置する旧網元の家である。主屋は、規模桁行12間、梁間6間の木造平屋建てで、寄棟造、茅葺き屋根の建物だった。家蔵の普請関係文書(御手伝帳)から、文化7年(1810)という建築年代が確認されており、歴史的価値のある民家建築で、後藤研究室では、国の登録有形文化財への登録を目指し、2010年8月に調査を行っていた。同家にはまた、盆棚等の古くからの生活習俗やそれにかかわる装備もよく残されていたので、国立歴史民俗博物館も調査を行っていた。

震災発生2週間後に「屋根だけ残った」という知らせを聞き、現地入りし確認したところ、建物は津波により押し流され、元の場所から約100m移動し、90度回転して屋根が形を変えずに残されていた。自衛隊の配慮等によって、遭難者探索のための緊急撤去を免れることができたため、1カ月後には後藤研究室と国立歴史民俗博物館の有志が中心となり、地元の関係者と協力して保存のための団体を設立。研究室の学生をはじめとする多くのボランティア協力のもと、2011年4月末から残された屋根および小屋組を解体し、そのがれきの中から約1年か

けて柱や建具等の建築部材や、家財道具・古文書類等を拾い集め保管した。

長い時間をかけて保管のための活動ができたのは、所有者の尾形家の理解はもちろん、気仙沼市のがれき撤去の担当課に、尾形家周辺敷地のがれき撤去を後回しにしてもらうなど、部材確保に関して理解をいただいたことによる。また、がれき撤去担当の会社は「柱が傷つくから」と柱に縄をくり付け、1本ずつ分別を行ってくれた。

その結果、多くの部材を救出でき、尾形家住宅の98本の柱のうち31本を確認(このほか場所を特定できない柱30本を回収)、大黒柱も2本見つけられた。また、長押より上の部材の保存状態は大変よい。

尾形家住宅の復興に対しては、気仙沼市教育委員会、日本ナショナルトラスト、文化財保護・芸術助成財団、朝日新聞文化財団をはじめ、多方面から支援を得ている。現在、尾形家住宅を気仙沼市の指定文化財として再建築し、活用できる道を探っている。ただし、尾形家周辺の地区では、震災の前からあった大島架橋が、尾形家住宅の敷地を通して建設されることが震災後に決定した。これによって、元の場所で再建築することや周辺環境とともに残すことは不可能となってしまった。そこで現在は、市教育委員会と連携し、道路部局に働きかけ、尾形家住宅を道路整備に資する公共的な施設として復興し、地域の文化財を活かしたまちづくりに役立てるよう提案している。

気仙沼市には、尾形家住宅だけでなく、復興を目指す文化財が他にもある。そのことを多くの方に知ってもらいたいと思い、2012年9月17日に気仙沼市内で歴史文化シンポジウム「気仙沼で守りたいものがある。」を開催した。「文化財」を残すことは押し付けでできるかもしれない。でも、それだけでは未来に文化財は残せない。気仙沼で生きぬいてきた人だから守りたいものがあり、新たなまちをつくるために見直しておきたいものがあるのではないか。シンポジウムの目的は、住民に文化財を身近に感じてもらうことであった。多くの方に参加していただき、住民からも多くの意見をいただき、有意義な時間となった。

#### 参考URL

A. 尾形家修復保存会のHP <http://www.ogata-kesenuma.com/>